街の灯り物語

灯り――それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

灯りが消された夜

鳥越俊太郎　ジャーナリスト

灯

りといえば戦争中、電灯を黒い布で覆った灯火管制を思い出す。闇の中で息をひそめた幼い頃の体験。戦争が終わり、小学生になった僕は、貸本屋で本を借りるのが楽しみだった。ところが夜、夢中になって読んでいると、ふいに電気が消えてしまう。戦後間もない時期で、停電は日常茶飯事だった。田舎の家でトイレは家の端の暗いところにあったが、夜、トイレに行くにも足がすくむ。パッと灯りが戻ってきたときは、いつも嬉しかったのを覚えている。

長じて新聞社に入り、特派員として二年ほどテヘランに滞在した。一九八〇年代、イラン・イラク戦争のまっただ中で、毎日のように空爆があった。爆撃機が近づくと、ラジオから一斉にアラームが鳴り、数分後には停電。夜の灯りが空爆の標的にならないよう、街じゅうの灯りが消され、大都市が砂漠の闇に沈む。対空砲火の音を聞きながら、暗闇の中で身を縮めていると、日本が戦争をしていた幼い頃の体験が甦った。

消えたときにわかる灯りの大切さ。灯りは文明そのものだ。人類はずっと灯りを求めてきた。テヘランの南東約七〇〇㎞のヤズドという街に、ゾロアスター教（拝火教）の寺院を訪ねたとき、光を司る神、アフラ・マズダを祀る神殿に一五〇〇年以上前から燃え続けているという聖火があった。人間にとって光や灯りがいかに大切か。それがわかっていたからこそ、古代から火を神としてあがめ、今まで受け継がれているのだろう。

灯りを電気という便利な形で使えるようになったのは、人類史上ではほんの最近にすぎない。しかし一度その恩恵にあずかった現代人は、もうそれなしで暮らすことは難しい。

戦後、日本が築いた豊かな社会には、三つの要素がある。便利、清潔、安全――いずれも電気が灯りとして、また熱源や動力として豊かさを支えているが、世界を旅すれば、この三つが揃っている国は実は少ないことに気づかされる。電気のありがたさを実感できるのは、灯りを消された経験を持つ我々が最後の世代かもしれない。

当たり前と思っていることを、見直してみてほしい。若い世代は、電気を、まるで空気のように自然に手に入るものと思っていないだろうか。スイッチを押せばつく電気は、決して自然にあるものではない。どんなに豊かな時代でも、そこには誰かの努力があり、一生懸命電気をつくっている人がいる。そんな想像力を持てば、なにげない灯りが、もっと輝きを増して見えてくるだろう。

街の灯り物語

とりごえ　しゅんたろう　ジャーナリスト
1940年福岡県生まれ。京都大学文学部国史学専攻卒。毎日新聞社入社、大阪社会部、東京社会部、外信部等を経てサンデー毎日編集長。89年退社し、『ザ・スクープ』などテレビ・ラジオ番組でキャスター、コメンテイターとして活躍。01年日本記者クラブ賞、04年ギャラクシー賞報道活動部門大賞受賞。著書『異見―鳥越俊太郎のジャーナリズム日誌』『ニュースの職人「真実」をどう伝えるか』『本当は知らなかった日本のこと』他多数。
http://www.shuntorigoe.com/